

誤認された倭城2題 : その1 : 実在しなかった「倭城洞」

石橋, 道秀
九州大学大学院比較社会文化学府 : 修士課程

<https://hdl.handle.net/2324/1522067>

出版情報 : 21世紀COEプログラム(人文科学)「東アジアと日本 : 交流と変容」ニューズレター. 5, pp. 1-4, 2005-03-25. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :



誤認された倭城2題

その1 実在しなかった「倭城洞」

比較社会文化学府修士課程 石橋 道秀

1 はじめに

本稿は、平成16年12月25日から28日にかけて行った、固城、巨濟^{コソ}、巨濟^{コジ}、熊川^{ウンチョン}などに残る倭城踏査の報告である。踏査は服部英雄教授と光成準治氏、それに石橋によって行った。本稿では今回の踏査で見聞した巨濟島の「倭城洞^{ウエソンドン}」の地名について述べる。本踏査で用いた資料は「九州大学文学部九州文化史研究施設架蔵倭城趾図」(以後「九大図」³と記述)及び『倭城の研究創刊号』(城郭談話会、1997)などである。

2 実在しなかった倭城洞

1) 通じなかった倭城洞

26日早朝、『倭城の研究』に記載された「倭城洞城⁴」を目指した。私がタクシーの運転手に目的地を告げると、「そんな名前は聞いたことがない」と訝しがる。よほどこちらの発音が悪かったのだらうと思い、地図を提示することにした。また、「九大図」の一つである「見乃梁城^{キョンネリャンソン}」も併せて見せた。

運転手はタクシー会社に連絡を取り始めた。こちらに運転手と交信相手との交信内容が伝わってくる。2人は倭城洞は개나랑^{ゲナラ}(見乃梁の方言)の南ではないかと言っている。東に丘が続き、海峡に注ぐ川が見え始めた。この時、後部座席の教授から「ここで車を止めて」と、自信に満ちた指示があった。この言葉は日本語ではあったが、運転手は意味を察知し、ブレーキを踏み急停車した。私たちは川の手前で下車し、倭城の遺構を確認した。

その後、「倭城洞城位置図」を手にして村の中を歩き回り、聞き取り調査を行った。老婦人に尋ねた結果、私たちが調査しているところは、沙等面^{サドワンミョン}(사등면)であるが、地名は倭城洞ではないという。詳しくは유헌인^{ユハンイン}氏に尋ねることを勧められた。

この老婦人との会話で、先刻のタクシー運転手に倭城洞が通じなかった理由が判明してきた。倭城洞は実在しない地名ではないのか。倭という蔑称は行政地名にはなじまない⁵。

私たちは、小一時間、유헌인^{ユハンイン}氏⁶に聞き取り調査を行った。その結果、そこは倭城洞で

1 巨濟は『新增東國輿地勝覧』には「巨濟縣」として見え、縣の範囲を次のように記している。

東至玉浦二十里西玉見乃梁三十七里至固城縣界水路三里南至塔串四十一里北至永登浦五十里距京都一千四十四里

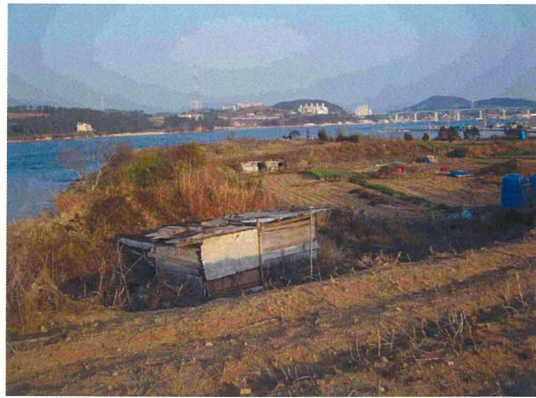
2 「洞」は、地方行政区域の末端機構で、行政地名の一つである。

3 「九大図」の作成時期は1927-1932ごろであろうとみておく。福島克彦「戦前の倭城研究について」『倭城の研究』、1997、p122。

4 高田徹「巨濟島4倭城の縄張り」同上書、p33。

5 一部「倭館」、「倭幕谷」などの地名は認められるが一般的ではない。

6 氏は小学校4年生までは日本の大阪枚方市で暮らし、日本名は加藤一郎といった。



← 最高所から見た廣里倭城(徳湖里倭城、旧名称倭城洞倭城)
本来は土手には3メートル以上の高い石垣が積まれていたが、太平洋戦争後に耕作者がすべて取り去った。人家近くに立地する倭城遺跡の宿命である。
左手海は奥に鎮海湾に通じる。右が巨濟島、左が固城半島。



← 今も残る堀跡

はなく、沙等面の一つの集落の徳湖里^{トツコリ}あるいは廣里^{クワンニ}であることが分かった。

2) 徳湖里^{トツコリ}にある2つのウェソンとイエソン

聞き取り調査の結果、2つのウェソンとそれに類似した地名があることが判明した。次は^{クワンニ}정인氏の聞き取り調査から得られた地名と、それにまつわる話である。

① ^{トツコリ}倭城(倭城) ……倭城の地名は存在するが、倭城洞という村の名前はない。氏が日本から帰国した直後は石垣が残っていたことを記憶している。石垣の高さはゆうに3^{トル}はあり、そこは遊び場であった。一部のみ石壁が

確認できるが、現在ではほとんど壊れてしまっている。戦後の食糧難の時代に、イモを栽培するため耕作地としたからである。

② ^{トツコリ}외성(外城) ……城の外にあるのでこの地名がある。したがって、倭城と外城は全く意味が違う。現在では、宅地となっている所である。氏が住んでいる所の地名は倭城ではなく、外城である。また、^{トツコリ}외성은성말부락ともいうが、^{トツコリ}성말の성은城の意味であり、말は^{トル}마을が縮まった形で、^{トル}마을は村の意味である。^{トル}부락は漢字で部落と書き、村落を意味する。

③ ^{クワンニ}예성(昔の城) ……廣里の西側の丘(倭城



の位置)に着けられた地名で、昔の城の意味をもつ地名である。これも日本人には上述のウェソンに近い音に聞こえてしまう。

その他、倭城の存在を裏付ける次の地名とその由来や伝承も聞き取った。

・충담、각담……충담は廣里の真ん中にある。충は中、담は堀の意味である。また、각담の地名が東北にある。각は角の意味である⁷。

・見乃梁(견내량)……沙等面にある地名で、廣里の北にあたる。倭城の下は海岸道路となっているので、歩いて20分ぐらいで行ける。見乃梁には見乃梁渡船場(견내량도선장)という渡し場はあったが、城跡は聞いたことがない。見乃梁は巨濟大橋の下で、今はバスの発着所となっている。

氏は李舜臣将軍が、見乃梁に停泊していた日本の水軍を撃破したことを聞いたことはあると証言した。しかし、見乃梁が倭城であった証拠はない。

以上のとおり、倭城に関連のある地名は採録できたが、城郭談話会の用いた「倭城洞」の地名は実在しなかった。また、「九大図」の「見乃梁城」と「倭城洞城縄張り図⁸」は一

致し、同一の城であるが、「見乃梁城」も存在しなかった。「九大図」に記載された「見乃梁城」は、朝鮮総督府の城郭調査担当が、軍事上名高い見乃梁を冠して城の名としたものと考えられる⁹。

一方、「倭城洞」の地名について、現時点では、いつ、だれが最初に用いたかを特定するのは困難であるが、1920年(大正9)に伴三千雄が「歴史地理」に発表した論文で確認した¹⁰。しかし、この地図によって1917年(大正6)に「倭城洞」の地名があったとは言えない¹¹。

1916年(大正5)測量の「朝鮮交通図」には「倭城」をはじめとして、「沙等面」「徳湖里」「見乃梁」の記載はあるが、「倭城洞」の記載はない¹²。また、越智唯七編纂『新舊對照朝鮮全道府郡面里洞名稱一覽¹³』にも、「沙等面」の「徳湖里」は掲載されているが、「倭城洞」の地名の掲載はない。

「倭城」は実在しても、「倭城洞」は実在しなかった。倭城洞は誤表記ではないのか。

⁷ 時間不足のため충담と각담について十分な確認をすることができなかった。『韓国地名総覧8』巨濟郡、徳湖里には가운데·담、갯·담の地名が見える(p38)。충담と가운데·담、각담と갯·담は同一の地名である。

⁸ 高田徹「巨濟島4倭城の縄張り」『倭城の研究』、1997、p34

⁹ 1530年ごろに編纂された『新增東国輿地勝覧』の「巨濟縣」の第1行に「見乃梁」は記載されている。しかし、「倭寇」の文字は見えても、「倭城洞」の地名は出てこない。

¹⁰ 伴三千雄「南鮮に於ける慶長文禄の築城(1)」の論文の冒頭に「南鮮ニ於ケル慶長文禄ノ築城」と題した地図が掲載され、「見乃梁院」の直下に「倭城洞」が括弧書きで併記されている(『歴史地理』、日本歴史地理學會、大正9年11月)。

¹¹ 伴三千雄は「大正六年八月より九月に亘り、約三旬の日子を以て半島を跋涉し、南海岸の築城調査には僅かに十日許りを費したに過ぎぬ。従つて未だ踏査を経ざる地多く、記事考證兩つながら精確を缺くるものが多いのは慚愧に堪へざる次第である(以下略 筆者)」と述べている。(同書、p367)。氏が現地を踏査されていれば、遺構を詳しく知ることができたであろう。

¹² 朝鮮総督府、「朝鮮交通図 馬山11 統營」五万分の一地図、印刷発行者陸地測量部、大正15年(1926)6月25日印刷6月23日発行による。

¹³ ソウル、太學社、大正6年発行。氏が基にした資料は、「朝鮮総督府官報、朝鮮彙報(總督府發行)、北方行政區域名稱一覽(明治45年5月同府編輯)、関係諸官廳ノ御回答書、朝鮮ニ関する地図、其他種々」となっている。p2より引用。

3 言語学からの接近

倭城洞の誤表記の原因は次のとおり説明できる。

まず「倭城(왜성)」が築かれ、倭城の地名が生まれた。本来、城の内部と外部とは区別されており、外部は「外城(외성)」と呼ばれていた。

しかし、巨済の方言では、「倭城(왜성)」と「外城(외성)」は、極めて類似した音、あるいは同一の音で発音されていた可能性が高い。その根拠として、『韓国方言資料集成』の「倭國」・「外國」の方言調査の結果報告を取り上げる。

この韓国精神文化研究院では、왜と외の発音の区別の有無を「倭國」・「外國」の単語で調査している。その結果、巨済では両語とも「왜국」と報告されており、왜と외の区別がされていない。両者はアクセントによって識別されている¹⁴。

「倭國」は第1音節にアクセントがあり、「外國」は第2音節にアクセントがある。このアクセントの型は、慶尚南道ではすべて同じパターンを示す。

徳湖里(廣里)の城跡を訪れた調査者は、村人が外城(왜성)と発音するのを、同音の倭

城と認識した。また、本来外城は村の名前であったため、韓国語の洞を付けるという二重の誤謬を犯してしまった。このような経緯によって、実在しない「倭城洞」の地名が生まれることになった。

4 まとめにかえて

これまでに、「倭城洞」の地名を冠した名詞は、倭城洞城、倭城洞城縄張り図、倭城洞城位置図、倭城洞城跡と学術論文あるいは紀要に掲載されている。これらの地名や用語から、さらに別の地名が増殖していくことが危惧される。地名として一度定着すると、次々と新しい地名が生まれる。これらの地名からは、歴史的事実を伴わない歴史が再生されていくことになる。地名は歴史の証人であり、今後は、韓国で一般に通用している「徳湖里」あるいは「廣里」を冠して呼ぶよう改められることを願う¹⁵。これら用語の統一について、日韓の研究者レベルで協議する必要がある。

また、聞き取り調査においては、上述のとおり初歩的な過ちを犯してしまう危険性があることを自戒の念をこめて報告する。

【主な参考文献】

- 韓国精神文化研究院、『韓国方言資料集成(慶尚南道篇)』、서울、韓国精神文化研究院、1993
한글학회、『韓國地名総覧8』、서울、한글학회、1979
高瀬哲郎、「倭城跡を訪ねて」『研究紀要第5集』、日本、佐賀県立名護屋城博物館、1999

¹⁴ 韓国精神文化研究院、『韓国方言資料集成(慶尚南道篇)』、서울、韓国精神文化研究院、1993、p320

¹⁵ 『韓國地名総覧8』によると、「徳湖里」の中に「廣里」がある。より正確に言えば「廣里」が望ましいと考える。